

サントアンジェロ・イン・フォルミス 聖堂のシビュラ像について

伊藤博明*

はじめに

イタリア南部、カンパーニア地方のカプアの近く、ティファータ山の麓には、古代ローマ時代に「アド・アルクム・ディアナエ」(Ad arcum Dianae)と呼ばれた、この地方の諸民族連合の至聖所である、ディアーナ・ティファティーナ神殿 (tempio di Diana tifatina) 存在していた。この地に移住したランゴバルト族が7世紀頃に、このディアーナ神殿の跡地に建造したのが、大天使ミカエルに捧げられた、サントアンジェロ・イン・フォルミス (Santa'Angelo in Formis) 聖堂である。その後、カプア公リカルド1世 (Richard I 在位1058-78年) が1072年に、カプア近郊に位置する、聖ベネディクトゥスが7世紀に創立した有名なモンテ・カッシーノ修道院にこの聖堂を寄進した。当時の修道院長はデジデリウス (Dediderius 在職1058-86年) であり、寄進を受けた1072年から1086年の間に聖堂を全面的に改築し、内部の壁面に装飾を施した [図1]。聖堂の幅は15.7メートル、長さは24メートルの、カンパーニア地方に典型的な3廊式のバシリカ聖堂である [図2]¹⁾。聖堂の復興に尽くした修道院長の名前は、扉口の上方のまぐさ石に次のように刻まれている。

*専修大学文学部教授



図1 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂 ファサード



図2 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂 内部



図3 「デジデリウス」 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂 後陣

あなたは、デジデリウスのように、あなた自身を知るならば天上に昇るだろう。彼は、聖霊に満たされて、律法とともに信仰を堅持して、この神へ至る家を建てたので、終わりを知らない報酬を得るだろう²⁾。

デジデリウスの姿は聖堂内の東側の後陣に描かれている。中央でキリストが右手を挙げ、左手に開かれた本をもって玉座に座っている。彼の周りには4人の福音書記者を示す象徴が描かれ、彼の下方には3人の天使が、そして天使たちの右側に聖ベネディクトゥスが、また左側にデジデリウスが矩形の後光を頭に戴き、聖堂の模型をもつ姿で表現されている [図3]。西側の正面扉口の裏面にあたる壁画の主題は「最後の審判」であり、上段にはラッパを吹く天使と、それによって甦る死者たちが描かれている。第2層と第3層の中央には大きなマンデルラの中のキリストが描かれ、左右

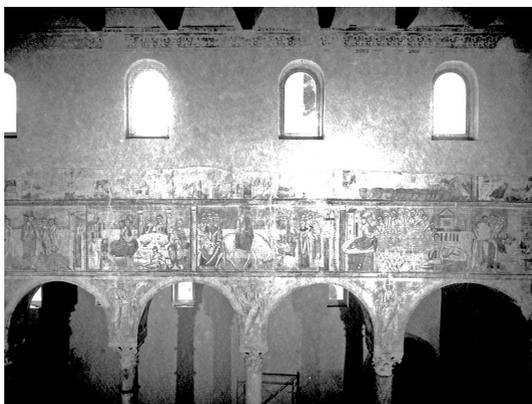


図4 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂 身廊 北壁

には天使たちと十二使徒が配されている。キリストの下に位置する3人の天使は選別の言葉を記した巻物をかかげ、第4層と第5層には、選ばれた聖職者たちと断罪された聖職者たち、そして、天国に迎えられた人々の喜悅と地獄に堕ちた人々の懊悩が見いだされる。

聖堂の身廊の左右の壁面には3段にわたって、新約聖書に拠るエピソードが、また側廊の壁面にも2段にわたって、旧訳聖書に拠るエピソードが描かれている [図4]。壁面は破損されてしまった箇所も多いが、先行研究は諸テーマと図像のサイクルについて復元の試みを行っている。壁面の装飾の下にはアーケードが設けられており、それがつくる18のスパンドレル（三角小間）には、十字架上のキリストの下部が描かれている1箇所を除いて、旧約聖書に登場する預言者と王、そして、ローマの予言者であったシビュラが描かれている。これらの者たちは立像であり、手に預言を記した巻物をもっており、その背後に人物を同定する名称が記されている [図5]³⁾。本稿の課題は、これらの人物像、とりわけ、イタリア美術に現われた最初期の例となるシビュラの像について解明することである。

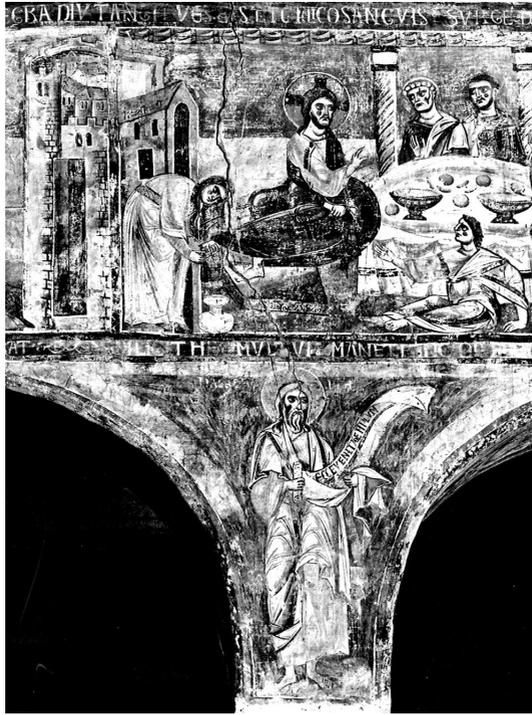


図5 「ベタニヤの塗油」「マラキ」サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂
身廊 南壁

1 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のスパンドレル

正面の扉口から主祭壇に向かって南側のスパンドレルから順に見ていきたい⁴⁾。

(1) 預言者イザヤ EAIAS P[ROPHETA] インスクリプションはごく一部しか判読することができない。デ・マッフエイの復元によれば次のとおりである⁵⁾。ECCE VIRGO CONCIPET FILIUM. 「見よ、処女が身ごもり、男の子を産むだろう」。『イザヤ書』(7:14)。

(2) 預言者エゼキエル EZEHCIEL<sic> P[ROPHETA] インスクリプション：PORTA H[A]EC QVAM VIDES CLAVSA ERIT ET N(ON) AP(ERI)ETVR ET V(I) R N(ON) TRAN(SIBI)T. 「あなたが見ている門を閉じてはならない。それを開けてはならないし、誰も通ってはならない」。ラテン語訳ウルガタ版『エゼキエル書』(44：14)では次のとおり。Et dixit dominus ad me: Porta haec clausa erit: non aperietur, et vir non transibit per eam. 「そして主は私に言った。この門を閉じてはならない。それを開けてはならないし、誰もその中を通してはならない」。

(3) 預言者エレミヤ(?) 名称もインスクリプションも判読できない。クラウスは1893年に刊行した論考において、双方の文字とも認識できないと述べている⁶⁾。サラザーノはすでに、預言者のエレミヤと推測していたが(1871年)⁷⁾、その後の研究者の中で、パレンテ(1912年)、ヴェトシュタイン(1960年)、モリザーニ(1962年)、デ・マッフエイ(1984年)、グラス(1987年)、グンハウス(1992年)は同様に、エレミヤと考えている⁸⁾。他方、ミノットはハバククを想定している⁹⁾。たしかに、旧訳聖書における四大預言者の一人であるエレミヤが聖堂内に描かれていても当然ではあるが、この同定はあくまでも推測の内に留まるであろう。

(4) 預言者ミカ。MICHEAS P[ROPHETA] インスクリプション：TV BETHLEEM EF[R]ATA PARVVLVS ES IN MILIB[VS] IVDA. 「ベツレヘム・エフラタよ、汝はユダの兵士たちの中で弱いものであるが」。『ミカ書』(5：2)。

(5) 預言者バラム。BALAAM P[ROPHETA] インスクリプション：ORIVTVR STELLA EX IACOB. 「一つの星がヤコブから進み出る」。『民数記』(24：17)。

(6) マラキ。MALACHIAS インスクリプション：ECCE VENIT DICIT.¹⁰ 「見よ、彼が来る、と [主は] 言う」。『マラキ書』(3：1) では次のとおり。Ecce venit dicit Dominus exercituum. 「見よ、彼が来る、と万軍の主は言う」。

(7) 預言者ゼカリヤ。ZACHARIAS PROFETA. インスクリプション：ECCE REX TVVS VENIET SEDENS SVPER ASINAM. 「見よ、あなたの王が、驢馬に座って来る」。『ゼカリヤ書』(9：9) では次のとおり。Ecce rex tuus veniet tibi iustus et salvator ipse pauper et ascendens super asinum. 「見よ、あなたの王が、義しい救い主が、貧しいままで、驢馬に乗って、あなたのところに来る」。『マタイによる福音書』(21：5) の次の記述も参照。Dicite filiae Sion ecce rex tuus venit tibi mansuetus et sedens super asinam. 「シオンの娘に言いなさい。見よ、あなたの王が、柔和な方が、驢馬に座って、あなたのところに来る」。

(8) 預言者モーセ。MOSES PROFETA. インスクリプション：PROPHETAM TIBI SVSCITABIT DN[OMI]N[V]s ... 「[主は] あなたの中から、預言者を立てるだろう」。インスクリプションは破損が激しい。インスクリプションに対応する『申命記』(18：15) は次のとおり。Prophetam de gente tua et de fratribus tuis sicut me suscitabit tibi Dominus Deus. 「主である神は、あなたの民とあなたの兄弟たちの中から、私のような預言者を、あなたに立てるだろう」。『使徒言行録』(3：22) も参照。Prophetam vobis suscitabit Dominus Deus vester de fratribus vestris tamquam me ipsum. 「あなた方の主である神は、あなた方の兄弟たちの中から、私のような預言者をあなた方に立てるだろう」。

(9) ? 名称もインスクリプションも読み取ることができない。クラ



図6 「最後の審判」「ゲッセマネでの祈り」「イエスの捕縛」「シビュラ」
サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂 身廊 西壁・北壁

ウスは、オバデヤ、ハバクク、ナホムを候補して挙げており¹¹⁾、一方、ガンハウスはハガイと推測している¹²⁾。

続いて、北側のスパンドレルを、西側の壁面の「最後の審判」に隣接しているシビュラ像 [図6] から見ていきたい。

(10) 預言者シビュラ [図7]。SIBILLA P[ROPHETA]。インスクリプション：IVDICII SIGNVM TELLVS SVDORE MADESCET。「裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう」。「シビュラ」のあとの“P”という文字には、“r”を示す記号が重ねられており¹³⁾、この省略記号が“Per”を表わすと見なすことによって、あるいは“Pro”を表わすと見なすことによって、これまで解釈が分かれてきた。サラザーロ (1871年) もクラウス (1893年) も、それを PERSICA すなわち「ペルシアの」と同定した¹⁴⁾。この見解は、モリザーニ (1962年)、そして最近ではデ・ルーカ (1999年) に共有されている¹⁵⁾。

「ペルシアのシビュラ」とは、ローマの文人であるマルクス・テレンティウス・ウァロ (Marcus Terentius Varro, 116-27 BC) が『古代の人事と



図7 「シビュラ」 サントアンジェロ・イン・フォルミス聖堂 身廊 北壁

神事』 (*Antiquitates rerum humanarum et divinarum*) の中で挙げている、古代の各地で活動した10名のシビュラの一人である。この書物は失われてしまったが、当該の箇所は、初期のローマ教父のラクタンティウスの『神学教理』 (*Divinae institutiones*) の中に引用されている。「第一 [のシビュラ] はペルシアの (de Persis) のシビュラで、『マケドニアのアレクサンドロスの業績』を書いたニカノルが言及している」¹⁶⁾。なお、ウァロが言及している他の9名のシビュラは、リビア、デルポイ、キメリア、エリュトライ、サモス、クマエ、ヘレスポントス、ピュリギア、ティブルの名称が付されている¹⁷⁾。

この10名のシビュラのリストは、セビーリヤの司教イシドルス (Isidorus, ca. 560–636) の浩瀚な著作『語源誌』 (*Etymologiarum sive origium libri XX*)

を通して中世に伝えられた。同8巻第8章における「シビュラについて」という項目は、ラクタンティウスの記述に負っていることは明らかであり、彼は「10のシビュラの名前がきわめて学識ある作家によって挙げられている」と述べて、ウェアロのリストに見いだされる10名の名前を書き記している¹⁸⁾。その後、『語源誌』はピレネー山脈を越えて、ライン湖畔や北イタリアの修道院にまで至る。フルダの修道院長とマインツの総司教を務めた、博学で有名なラバン・マウル (Raban Maur, 776-856) は、その影響を受けながら、32巻から成る百科全書的な著作『万象について』(*De universo*) を執筆した。その第15巻第3章は「シビュラについて」と題されているが、その記述は『語源誌』の当該箇所を基にして、アウグスティヌスの著作から補ったものであり、ペルシアのシビュラを始めとして10のシビュラへの言及も見られる¹⁹⁾。そして、モンテ・カッシーノの修道院に所蔵されている、1022年から23年にかけて制作された『万象について』の写本(タイトルは『事象の本性について』*De rerum naturis*)には、10名のシビュラを描いた挿絵が収められており [図8]²⁰⁾、カスティニエイラスは、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のシビュラ像との図像的な類似性を指摘している²¹⁾。

他方、スパンドレル上のシビュラについて、「このシビュラをクラウドは誤って、ペルシアのシビュラと呼んでいる」と述べて、「エリュトライのシビュラ」と同定したのは、中世美術史の泰斗であるエミール・マールであった²²⁾。マールは省略文字を“pro”と見なし、全体で「預言者」(PROPHETA)と読んでいる²³⁾。そして、彼の解釈の根拠は、シビュラに付されたインスクリプション、すなわち「裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう」という文言に求められる。この託宣がラテン語で最初に引用されたのは、アウグスティヌスの『神の国』(*De civitate Dei*) 第18巻第23章においてであった。彼は学識ある総督フラキアヌスから、「エリュトライのシビュラの託宣」(*carmina Sibyllae Erythraeae*)として、ギリシア語

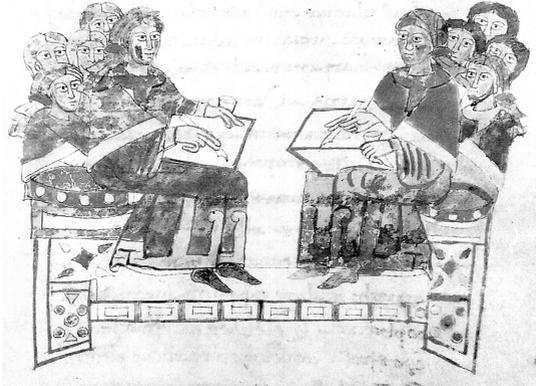


図8 「10人のシビュラ」 ラバン・マウル『事象の本性について (万象について)』 Montecassino, Archivio dell' Abbazia, Cass. 132, p.379b.

の写本を手渡されたが、そこには、各行の冒頭の文字を繋げると「イエス・クレイトス・テウ・ヒュイオス・ソーテール」、すなわち「イエス・キリスト、神の子、救世主」となるアクロスティック（各行の冒頭の文字を繋げると意味を成す詩句）が書かれていた。続いて彼は、この託宣のラテン語を載せているが、その冒頭の一句が「裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう」であったのである²⁴⁾。その後、ヴェトシュタイン（1960年）、マッペルト＝シュミット（1967年）、グラス（1987年）、ジャコベッティとアービタ（1992年）、ガンハウス（1992年）などが、エリュトライのシビュラと見なしているが²⁵⁾、デ・マッフエイは長文の論考において（1984年）、ティブルのシビュラと同定する試みを行っている²⁶⁾。この問題については、本稿で後に再び取り上げる。

(11) ダビデ王 [図9] DAVID REX インスクリプション：QVI EDEBAT PANES MEOS AMPLIAVIT ADVERSVS ME SVPLANTIONE[M]
「私のパンを食べた者が私に対して踵を返した」。『詩篇』（40：10）は次の



図9 「ダビデ」 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂 身廊 北壁

とおり。Qui edebat panes meos magnificavit super me subplantationem.
「私のパンを食べた者が私に踵を返した」。

(12) ソロモン王 [図10] SALOMON REX インスクリプション：
MORTE TVRPISIMA CONDEM (VS) EVM 「われわれは彼をもっとも
恥ずべき死で断罪しよう」。『知恵の書』(2:20) は次のとおり。Morte
turpissima condemnemus illum. 「われわれは彼をもっとも恥ずべき死で
断罪しよう」。

(13) 預言者ホセア OSEE P[RO]PHE[TA] インスクリプション：
ERO MORS TVA O MORS MORSVS TVVS ERO [INFERNE] 「死よ、私

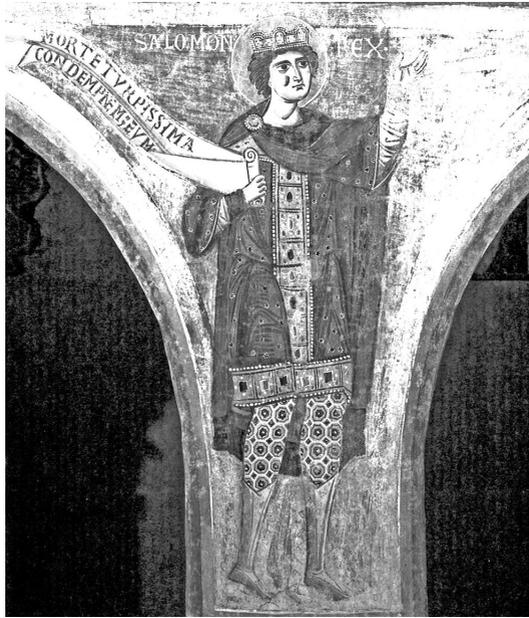


図10 「ソロモン」 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂 身廊 北壁

はおまえの死であろう。陰府よ、私はお前の噛み傷であろう」。『ホセア書』(13:14)。

(14) 預言者ゼファニヤ SOFFONIAS P[RO]PHE[TA] インスクリプション: EXPECTA ME DICIT DOMINVS IN DIE RESVRRECTIONIS 「復活の日を待ちなさい、と主は私に言う」。『ゼファニヤ書』(3:8)。

(15) 預言者ダニエル DANIEL P[RO]PHE[TA] インスクリプション: POST EBDOMADAS SEXAGINTA DVAS OCCIDETVR CHRISTVS 「62週のあとに、油を注がれた者は殺されるだろう」。『ダニエル書』(9:26)。

(16) 預言者アモス？ 名称もインスクリプションも判読が困難であるが²⁷⁾、研究者たちはアモスと同定している²⁸⁾。

(17) ? 図像も含めて完全に破壊されている。

このように、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のスパンドルに描かれた17名の人物の中で、確実に同定できるのは、イザヤ、エゼキエル、ミカ、バラム、マラキ、ゼカリヤ、モーセ、シビュラ、ダビデ、ソロモン、ホセア、ゼファニヤ、ダニエルの13名であり、残る4名の中には著名な預言者であり、「旧約聖書」にその名を冠した預言書が収められている、エレミヤ、アモス、ハバククが含まれている可能性が高い。いずれにせよ、この聖堂内においてシビュラは、唯一、「旧約聖書」に登場しない、元来は異教の予言者が、ここでは「旧約聖書」の預言者と王たちとともに、イエス・キリストに関わる預言を行った者として描かれている。このシビュラ像は、中世ヨーロッパ美術において表現された、最も早い例の一つであり、その理由を明らかにするためには、中世におけるシビュラの文学的・思想的伝統について論及する必要がある。

2 中世キリスト教世界におけるシビュラの伝承

上述したように、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂に描かれたシビュラが手にしている巻物に記された言葉——「裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう」——は、アウグスティヌスが『神の国』第18巻第23章において、シビュラの託宣（アクロスティック）の中で伝えていたものだが、元来は、『シビュラの託宣』して現在知られている、ギリシア語による託宣集に含まれていた。標準的なゲフケンによる校訂版（1902年）には第1巻～8巻、第11巻～14巻、断片1～7が含まれている²⁹⁾。この中で第

1巻～8巻は6世紀にビザンティンにおいて「序文」を付されて編纂されたものと推測されており、この託宣集は全体として統一された作品ではない。各巻およびその内部のテキストは執筆年代も作者も意図も一様ではなく、研究者の間で議論が別れている³⁰⁾。大略を示せば、第1～2巻はユダヤ教的なテキストがキリスト教的な変容を蒙っている。キリスト教的な視点がより明確なのは第6～8巻であり、これらの巻は2世紀中葉から3世紀初頭に作成されたと考えられている³¹⁾。他方、第3～5巻、および断片はユダヤ人によって書かれたもので、第3巻は紀元前140年頃、第4巻は80年頃、第5巻は120年代にそれぞれが成立している³²⁾。第11巻以降の諸巻はユダヤ教的で、成立は9世紀に下ると見なされている。初期キリスト教の教父たちの著作には『シビュラの託宣』からの引用が散見されるのはあるが、中世の著作家たちにおいてこの託宣集が直接的に参照された痕跡は見いだされない。

中世におけるシビュラ、および、彼女に帰される託宣（アクロスティック）の伝承において重要だった作品は、アウグスティヌスの『神の国』とともに、同様にアウグスティヌスの著作として流通していた『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』（*Contra Iudaeos, Paganos et Arrianos*）である。現在、この著作は、アウグスティヌスの同時代人で、カルタゴ教会の助祭を務めていたクウォドウルトデウス（*Quodvultdeus*）に帰せられている。彼とアウグスティヌスは親交があったようで、2通の往復書簡が残されている³³⁾。彼の活動の詳細は知られておらず、454年に亡命先のナポリで死去したと考えられている。ブラウンの校訂による著作集には10編あまりの著作が収められている³⁴⁾。

『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』全体は護教論的な説教であるが、その後への影響という観点から重要な箇所は、第11章から第16章までである³⁵⁾。この部分は12世紀以降、すべてが、あるいは部分的に取り出されて、クリスマスの時期の説教として読み上げられた。たとえば、アルル

ではクリスマス当日の朝課、6時課に、ローマではその前夜の朝課、4時課に読まれた。またイングランドでは、一般的に、降誕節の第4日曜日に読まれた³⁶⁾。たとえば、アルルに由来する12世紀の日課表に見いだされる、当該のテクス³⁷⁾は、「主の生誕についての、司教聖アウグスティヌスの説教 第6講話」(Sermo beati Augstini Episcopi de natale Domini Lectio Sexta)というタイトルをもっている。

『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』の内容は、第11章から第14章までは、ユダヤ人に対して、旧訳の預言者たちの証言を参照しながら、イエス・キリストの正当性を論じている。続いて第12章ではダニエルの、第13章ではモーセ、ダビデ、ハバククの、第14章ではシメオンとザカリアの言葉がそれぞれ引かれている。そして第15章では、異教の者たちのある言葉も、イエス・キリストについて証言していることが示される。クウォドウルトデウスは、まず『使徒言行録』(13:46)から、アンティオキアにおけるパウロの説教を引いている。すなわち、パウロはユダヤ人たちに対してこう述べる。「あなた方にまず、神の言葉が語られなければならなかったのです。ところがあなた方はそれを拒み、あなた方を永遠の生命に値しない者にしています。そこで私たちは異邦人の方に向いているのです」。そして、異邦人の中からキリストについての証言が為されたことを示そう、と言ってこう続ける。「あの最も雄弁な詩人が自らの詩句において、〈いまや、新しい子が高き処から遣わされる〉³⁸⁾と述べたとき、キリストへの証言が与えられなかったであろうか³⁹⁾」。

この詩句は、ウェルギリウスの『詩選』第4歌に拠っており、そこでは、この言葉はクマエのシビュラに帰されていた。クウォドウルトデウスはもう1人の例として、新バビロニアの王、ネブカドネツァルを挙げて、『ダニエル書』第3章からの言葉を引用している。そして、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』第16章はすべて、シビュラの予言に充てられており、アウグスティヌスの『神の国』に挙げられているアクロスティックが

次のように引用されている。

- (I) 裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう。
- (H) 天から、永遠に支配する王が来るだろう。
- (Σ) すなわち、身体と地上を裁くために現われる⁴⁰⁾。
- (O) それゆえ、不信仰者も信仰者も神を見るだろう、
- (Υ) この世の終わりに、聖徒たちとともに高みにおられる神を。
- (Σ) こうして、魂は身体とともに神の前に出て、神が魂を裁くだろう、
- (X) 大地が繁った茨の茂みに覆われて荒廃したまものときに。
- (P) 人々の偶像も、財産もすべて投げ捨てられるだろう。
- (E) 火が大地を焼き払い、そして火は大洋と天空まで、
- (I) そして、忌まわしいアウエルヌス [冥府] の門を破壊するだろう。
- (Σ) しかし聖徒たちは、身体全体に自由な光が
- (T) 注がれて、永遠の炎が罪人たちを焼き尽くすだろう。
- (O) そのとき各々は、隠された所業を明らかし、秘密を
- (Σ) 語るだろう。そして神は光へと心を開くだろう。
- (Θ) そのとき悲嘆の声が起こり、誰もが歯ざしりをするだろう。
- (E) 太陽の光輝は奪われ、星辰の輪舞は止むだろう。
- (O) 天は巻き上げられ、月の輝きも消え、
- (Υ) 丘は低くなり、谷が底から持ちあがるだろう。
- (Υ) 人間の世界には高いものも低いものもなくなるだろう。
- (I) 今や、山は平地と等しくなり、青い大海は
- (O) すべての動きを止めて、大地は砕かれて消えるだろう。
- (Σ) こうして、泉も河もともに、火によって干上がるだろう。
- (Σ) しかしそのとき、喇叭が悲しい音色を、大地の高いところから
- (Ω) 響かせるだろう、悲惨な行為とさまざまな労苦を嘆きながら。
- (T) 大地は裂け、タンタロスの深淵が現われるだろう。

- (H) そしてそのとき、主の前に王たちは一つとなって立たされるだろう。
 (P) 天からは火と硫黄の流れが落ちてくるだろう⁴¹⁾。

彼は続けて、これらの詩句が、キリストの生誕、受難、復活、そして二度目の降臨について語ったものであり、ギリシア語で各行の冒頭の語を順に辿っていく者は、そこに「イエス・キリスト・テウ・ヒュイオス・ソーテール」、すなわち、ラテン語では「イエス・キリスト、神の子、救い主」を見いだすだろう、と述べる。そして、キリストの受難をより明瞭に示している、シビュラの別の詩句に熱心に耳を傾けよう、と述べて⁴²⁾、ラクタンティウスの『神学教理』における『シビュラの託宣』からの幾つかの引用を、アウグスティヌスがまとめた詩句を置いている⁴³⁾。このように、クウォドウルトデウスの『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』第16章は、ほぼすべてをアウグスティヌスに負っているのである。

『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』の第11章から第16章がヨーロッパ中世に与えた影響は、教会における説教に利用されただけに留まらず、このテキストを模範としつつ、12世紀には『預言者たちの行列』(*Ordo prophetarum*) と呼ばれる、新しい典礼劇のジャンルが登場した⁴⁴⁾。同時代のリモージュの聖マルティアリス修道院で制作された『預言者たちの行列』⁴⁵⁾ では、舞台上で呼びかけ役の人物が、預言者たちに問いかけ、それに対して預言者たちが応答するという形式をとっている。ここでは、イスラエルからシビュラまで、13名の人物に対して、問いと返答が繰り返されている。『預言者たちの行列』の登場人物を『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』と比較するならば、そこにイスラエルが加わり、ザカリアが除かれているだけである。ただし、預言の言葉については、内容が異なっていることも多い。

たとえば、『預言者たちの行列』中のモーセの言葉は、「律法者よ、ここに近寄り、そしてキリストにふさわしいことを語れ。——神は汝らに預言

者をお与えになるだろう。私と同様に、この者に耳を傾けよ。彼の言葉を聞かない者は自らの民から放逐されるだろう」⁴⁶⁾ (『申命記』18:15, 18:19を参照)である。他方、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』においては、「神はあなた方の兄弟たちから、預言者をあなた方に対して立ち上がらせるだろう。預言者に耳を傾けない魂はすべて、自らの民から追放されるだろう」⁴⁷⁾と語られている。ダニエルの場合は、後者においては、「最も聖なる者が来たとき、塗油を終えるだろう」(『ダニエル書』9:24)という言葉が引かれているが⁴⁸⁾、前者においては、「最も聖なる者が来て、油が注がれるだろう」⁴⁹⁾である。なお、ラテン語訳ウルガタ版では、「最も聖なる者が油を塗られるだろう」であり⁵⁰⁾、この場合は、『預言者たちの行列』と『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』の関係の方が、ウルガタ版との関係よりも近接している⁵¹⁾。

最後に登場するシビュラについては、次のように語られている。「さてシビュラよ、汝がキリストについて預言している真の徴について明らかにせよ。——裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう。天から、永遠に支配する王が来るだろう。すなわち、身体において、地上を裁くために現われる。——信じることのないユダヤ人よ、まだ恥知らずのままにいいのか」⁵²⁾。シビュラの言葉については、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』におけるアクロスティックの冒頭の詩句と一致している。

『預言者たちの行列』はまた、13世紀のラン大聖堂、および14世紀のルーアン大聖堂に由来する写本で伝えられており、細部や長さは異なっているが、形式的にはリモージュのものと同様である⁵³⁾。ルーアンの『預言者たちの行列』では本文の前に、登場人物について描写されており、シビュラは「女性の服をまとい、髪を剃り、キズタを冠にして、狂人のように見える」⁵⁴⁾と記されている。テキスト中でシビュラは、「汝、シビュラよ、かの予言者よ、裁きの到来を語れ、裁きの徴を語れ」と呼びかけられ、それに対してシビュラは、アクロスティックの最初の5行によって回答して

いる。すなわち、「裁きの徴。大地は汗で濡れるだろう。天から、永遠に支配する王が来るだろう。すなわち、身体において、地上を裁くために現われる。それゆえ、不信仰者も神を見るだろう、この世の終わりに、聖なる者たちとともに高みにおらえる神を」⁵⁵⁾。このように、ヨーロッパの中世末期までシビュラの名称は、種々の『預言者たちの行列』を通して、預言者たちや王たちとともに伝えられていった。

3 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂におけるシビュラ

アウグスティヌスに帰された『ユダヤ教徒，異教徒，アリウス派駁論』が、中世の南イタリアにおいても流布していたことは、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂と関係の深い、モンテ・カッシーノ修道院に所蔵されている7つの写本から推測することができる。それらは、写本番号の第99番，第100番，第103番，第106番，第107番，第115番，第462番であり，第115番（1200年頃制作）を除いては，すべて11世紀に制作されている⁵⁶⁾。『ユダヤ教徒，異教徒，アリウス派駁論』を収めた写本は，「さまざまな聖人たちの説教」(Sermones et homiliae diversorum Patrum)と題されており，たとえば第100番（1073年に制作）には，アウグスティヌス，グレリウス，ベーダたちの説教のあとに，「主の生誕の日に」(In nat. Domini)読まれるべきものとして，「祝福された司教アウグスティヌスの説教」(Sermo beati agustini ep.)というタイトルで，『ユダヤ教徒，異教徒，アリウス派駁論』第11章から第16章が収められている（54～58ページ）。

サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のスパンドレルの人物像に対する，『ユダヤ教徒，異教徒，アリウス派駁論』の影響を強く示唆したのは，ドロシー・F・グラス（1987；1991）であった⁵⁷⁾。彼の指摘も踏まえながら，最初に，両者の関係について検討することにしたい。上述したように，サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂で確認できる人物は，イザヤ，エ

ゼキエル、ミカ、バラム、マラキ、ゼカリヤ、モーセ、シビュラ、ダビデ、ソロモン、ホセア、ゼファニヤ、ダニエルの13名であり、推測されているのは、エレミヤ、アモス、ハバククなどである。他方、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』に登場するのは、イザヤ、エレミヤ、ダニエル、モーセ、ダビデ、ハバクク、シメオン、ザカリアとエリザベト、洗礼者ヨハネ、ウェルギリウス、ネブカドネツイル、シビュラである。共通している人物は(推測も含めて)、イザヤ、エレミヤ、ダニエル、ダビデ、モーセ、ハバクク、シビュラであり、インスクリプションも含めて確実なのは、イザヤ、モーセ、ダビデ、ダニエル、そしてシビュラの5人である。

『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』におけるイザヤの証言は、「見よ、処女が見ごもり、男の子を生むだろう。そしてその名前はエンマヌエルと呼ばれるだろう」(『イザヤ書』7:10)であり⁵⁸⁾、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂の、復元された「見よ、処女が身ごもり、男の子を産むだろう」という言葉と一致する。次に、モーセについては、前者のモーセの証言は、「神はあなた方の兄弟たちから、預言者をあなた方に対して立ち上がらせるだろう」(『申命記』18:15)と「預言者に耳を傾けない魂はすべて、自らの民から追放されるだろう」(同18:19)であり⁵⁹⁾、後者では、「[主は]、あなたの中から、預言者を立てるだろう」である。ウルガタ版では、『申命記』の該当する箇所は、「主である私は、あなたの民とあなたの兄弟たちの中から、私のような預言者を、あなたに立てるだろう」であって、両方とも異なり、後者のインスクリプションが破損していることも考慮すると、単純な比較は困難である。

前者のダビデの証言は、「地上のあらゆる王が彼を敬い、あらゆる民が彼に仕えるであろう」(『詩編』71:11)、「主はわが主に向かって言った。汝はわが右側に据わるように、私が汝の敵たちを汝の足下に置くまでは」(『詩編』109:1)、「なぜもろもろの国は騒ぎたて、もろもろの民は立ち上がり、君主たちは一致して主に、そして彼の油を注がれた者[キリスト]

に敵対した」(『詩編』2:1-2)⁶⁰⁾である。後者では、「私のパンを食べた者が私に対して踵を返した」(『詩編』40:16)であり、両者は異なる文言を引用している。最後にダニエルの証言について、前者では、「最も聖なる者が来るとき、塗油を終えるだろう」(『ダニエル書』9:24)⁶¹⁾であり、後者では、「62週のあとに、油を注がれた者は殺されるだろう」(『ダニエル書』9:26)である。両者とも『ダニエル書』第9章から引用しているが、その箇所は異なっている。

サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のインスクリプションの状態が悪いために、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』と十分に比較することができないが、以上の対照からも、前者が後者の正確な模倣ではないことは明らかであろう。一方で、上述した『預言者たちの行列』のテキストとの関連を、パウル・ヴェーバーは1895年に指摘していた⁶²⁾。『預言者たちの行列』の成立は12世紀以降と考えられるので、彼の議論は根拠が薄いのであるが、『預言者たちの行列』に関係する、われわれの考察にとって有益な写本が伝えられている。このテキストは、南イタリアのサレルノ大聖堂に由来するもので、「生誕の夜に、最初のミサの後に、司教聖アウグスティヌスの説教が、サレルノ式に読まれる」(In Nativitatis Nocte post Primam Missama legitur Sermo Sancti Augustini Episcopi, More Salernitano)と題されている⁶³⁾。この説教は1594年にナポリで刊行された説教集に収められているが⁶⁴⁾、ヤングは古い伝承に遡るものであると推測している⁶⁵⁾。

この説教はタイトルが示唆しているように、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』の内容に忠実であるが、削除した箇所や、加筆した箇所が存在しており、また、説教者と返答者(預言者)が異なる人物によって対話しており、形式的には、『預言者たちの行列』への過渡的な段階にあるものと見なすことができる。たとえば、クウォドウルトデウスのテキストにおいて、「彼[ダビデ]自らに、キリストについて語らせることにしよう。

彼はこう言った。〈地上のあらゆる王が彼を敬い、あらゆる民が彼に仕えるだろう〉(『詩編』71:11)。誰に仕えるのだろうか。誰に仕えるのだろうか。語りなさい。あなたは、誰に仕えるかを聞きたいだろうか。〈主はわが主に向かって言った。汝はわが右側に据わるように、私が汝の敵たちを汝に足下に置くまでは〉(『詩編』109:1)⁶⁶⁾と述べられている箇所は、サレルノ大聖堂のテキストでは次のようになっている。

説教者：……汝、預言者ダビデよ、キリストについての証言を語りなさい。

ダビデ：地上のあらゆる王が彼を敬い、あらゆる民が彼に仕えるだろう。

説教者：誰に仕えるのだろうか。誰に仕えるのだろうか。語りなさい。

ダビデ：あなたは、誰に仕えるかを聞きたいだろうか。

説教者：聞きたいのです。

ダビデ：主はわが主に向かって言った。汝はわが右側に据わるように、私が汝の敵たちを汝に足下に置くまでは⁶⁷⁾。

しかし、本稿の課題にとって重要な相違点はシビュラの記述に関わる箇所である。『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』の第15章は異教徒であるウェルギリウスの証言(『詩選』4:7)とバビロニアのネブカドネツァルの証言(『ダニエル書』3:91-92)の後にこう続けている。「おお、異邦の者(alienigena)よ、どうしてあなたにはこのことが起こったのか。誰があなたに神の子について告げたのか。いかなる法が、どの預言者があなたに神の子について告げたのか。彼はまだこの世に生まれておらず、生まれた者の顔もあなたに知られていなかったのに。どうしてあなたにはこのことが起こったのか。誰があなたにそのことを告げたのか、あなたの内部を神の火が照らして、あなたの下に敵対するユダヤ人たちが囚われていたときに、このようにあなたが神の証言を述べたのでないとするならば」⁶⁸⁾。

続く第16章で、クウォドウルトデウスは、2人か3人の証人の口によっ

て、あらゆる言葉は確固となると述べ、『ヨハネによる福音書』（6：17）から、「あなた方の律法の中に、2人の人間の証言は真実である、と書かれています」というイエスの言葉を引きながら、異教徒から第三の証人を導きだして、真理の証言を強化しようと述べ、次のように語っている。「シビュラがキリストについて予言したことをわれわれは公にしよう。すなわち、1つの石 (lapis) によって、2つの額が、すなわち、ユダヤ教徒と異教徒が打ちつけられ、そしてゴリアトのように、その剣によって、キリストの敵どもはすべて刺し殺されるだろう、ということ。シビュラの言ったことを聞きなさい」⁶⁹⁾。そして、「裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう」で始まるアクロスティックが引用される。

サレルノ大聖堂の説教の対応する箇所は以下のとおりである。

説教者：おお、異邦の者よ、どうしてあなたにはこのことが起こったのか。誰があなたに神の子について告げたのか。彼はまだこの世に生まれておらず、生まれた者の顔もあなたに知られていなかったのに。シビュラがキリストについて予言したことをわれわれは公にしよう。すなわち、1つの煉瓦 (later) によって、2つの額が、すなわち、ユダヤ教徒と異教徒が打ちつけられ、そしてゴリアトのように、その剣によって、キリストの敵どもはすべて刺し殺されるだろう、ということ。シビュラの言ったことを聞きなさい。シビュラよ、あなたは、キリストについての証言を語りなさい。

エリュトライのシビュラ：裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう⁷⁰⁾。……

このように、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』では、アクロスティックの作者について、ただ「シビュラ」と表現されていたのだが、サレルノ大聖堂の説教では、「エリュトライのシビュラ」(Sibilla Erythraea)と特定されているのである。上述したように、この帰属については、アウグスティヌスが『神の国』（18：23）において、「エリュトライのシビュラ

の託宣」(carmina Sibyllae Erythraeae)と述べていた。サレルノ大聖堂の説教を作成した者が『神の国』の一節を記憶していたとも考えられるが、中世においては、このアクロスティックをエリユトライに帰属させているテキストが、その他にも流布していたのであり、それが、上述したラバン・マウルの『万象について』である。その第15巻第3章は「シビュラについて」と題されており、最初に、ウェアロの記述に従って、ベルシアのシビュラからティブル(アルブネア)のシビュラまで10名のシビュラの名が挙げられている。

ラバン・マウルによれば、これらのシビュラは神とキリストについて多くのことを書き記したのであるが、「彼女たちの中でも、とりわけ有名で高貴な者はエリユトライのシビュラと言われている。彼女は、キリストについてある事柄を、詩句として書き記したが、各行の冒頭の文字を繋げると、ギリシア語で〈イエス・キリスト・テウ・ヒュイオス・ソーテール〉、すなわち、ラテン語では〈イエス・キリスト・神の子・救世主〉と解釈される⁷¹⁾。そして、ラバン・マウルは続けて、「裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう」で始まるアクロスティックを引用している。

ここで、この託宣がインスクリプションとして記されている、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のシビュラ像の考察に戻ることにしたい。第一に確認しておくべきことは、シビュラ像が単独ではなく、「旧約聖書」に登場する預言者たちと王たちともに、イエス・キリストに関わる預言者として描かれたことである。ヨーロッパ中世におけるシビュラについては、これまで言及してきたラクタンティウス、アウグスティヌス、クオウドウルトデウス、イシドルス、ラバン・マウル、『預言者たちの行列』にも多くの伝承過程があり、また中世において、シビュラの名を冠した新しい託宣集も生みだされた⁷²⁾。しかし、シビュラと預言者たちを同一のサイクルにおいて言及しているテキストは、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』と『預言者たちの行列』以外には存在しない。これまで検討してきた

ように、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のスパンドレルのサイクルが、これらのテキストに全面的に依存しているとは——とりわけ、インスクリプションの相違から——考えることができないが、その着想については、『ユダヤ教徒，異教徒，アリウス派駁論』、あるいは、サレルノ大聖堂の説教のようなテキストから影響を受けたと結論することができるだろう。

サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のシビュラがもつ巻物に記された言葉（アクロスティックの冒頭部）は、たしかに、アウグスティヌスと、彼に従ったラバン・マウルによれば、エリュトライのシビュラに帰されたものである。ただし、このアクロスティックは中世において、独立した託宣としてイタリアからイングランドまで広まっており⁷³⁾、また、新しく編纂された託宣集にも利用されている。たとえば、元来はギリシア語で執筆され、ラテン語版が10世紀に成立した、通称『ティブルのシビュラの託宣』（写本の表題が欠けている）にその全文が現われている⁷⁴⁾。この作品では、トラヤヌス帝に招かれたティブルのシビュラが、ローマの元老院議員たちが見た9つの夢の解釈を行うもので、第9の世代における、世界の終末と「最後の審判」の予言がアクロスティックの引用によって締め括られている。このテキストは130以上のラテン語写本が残されており、13世紀以前に遡るものが30ほど見いだされる。

サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂の図像プログラム作成した者は、さまざまなテキストの中から、このアクロスティックについての知識を得ていた可能性がある。たしかに、アウグスティヌス以来の伝統では、それにエリュトライのシビュラが結びつけられていた。しかし、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂においては、「預言者シビュラ」(SIBILLA P[ROPHETA])とだけ記されているのであり、そこにおいて、とくにエリュトライのシビュラが含意されていたと考えることはできないだろう。『ユダヤ教徒，異教徒，アリウス派駁論』に登場するのも、たんに「シビュラ」

であったし、たとえ、サレルノ大聖堂の説教のようなテキストが参照されたとしても、プログラム作成者が、そこにクマエのシビュラやティブルのシビュラと区別されたシビュラを見いだしたとは思われないのである。

註

- 1) サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂、およびその壁画装飾については以下を参照。Dometorio Salazzaro, *Gli affreschi della basilica di Sant'Angelo in Formis*, Napoli: Tipografia Strada Nuova Pizzofalcone, 1868; Pasquale Parente, *La basilica di S. Angelo in Formis (presso Capua) e l'arte del secolo XI*, Capua: F. Cavotta, 1912; Janine Wettstein, *Sant' Angelo in Formis et la peinture médiévale en Campanie*, Genève: Droz 1960; Ottavio Morisani, *Gli affreschi di Sant'Angelo in Formis*, Cava dei Tirreni-Napoli: Di Mauro, 1962; Anita Moppert-Schmidt, *Die Fresken von S. Angelo in Formis*, Zürich: Keller, 1967; Glenn Gunhouse, *The Fresco Decoration of Sant'Angelo in Formis*, PhD Dissertation, The Johns Hopkins University, 1991; Cian Marco Jacobitti e S. Abita, S. *La basilica benedettina di Sant'Angelo in Formis*, Napoli: Edizione scientifiche italiane, 1992. 同聖堂に関する邦語文献には以下のものがある。吉田祐子「サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂内壁画の作者に関する考察(1):その研究史と歴史的背景から」、『湘北紀要』(湘北短期大学), 第18号(1997), 101-124ページ。近藤フジエ「サンタンジェロ聖堂とその作品解釈の歴史の変遷」、『新潟大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編)』, 第3巻2号(2011), 209-221ページ。同「サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂」、『ロマネスク』, 「世界美術大全集」第8巻, 小学館, 1996年, 260-261, 386-388ページ。
- 2) Cited by Herbert Bloch, *Monte Cassino in the Middle Age*, 3 vols., Cambridge, MA: Harvard University Press, 1986, p.16. Cf. Wettstein, *op.cit.*, p.14; Morisani, *op.cit.*, pp.69, 77.
- 3) 註1に挙げた文献に加えて以下を参照。D. Andrea Caravita, *I Codici e le arti a Monte-Cassino*, Monte-Cassino, 1869, vol.1, pp.223-259; Dometorio Salazzaro, *Studi sui Monumenti della Italia meridionale*, Napoli, 1871, vol.1, pp.48-52; Franz Xaver Kraus, "Die Wandgemölde von S. Angelo in Formis," *Jahrbuch der R.Preussischen Kunstsammlungen*, 14(1893), pp.3-21, 84-100 [Berlin: G.Grote'shce Verlagsbuchhandlung, 1893]; Charles Minott, *The Iconography of the Frescoes of the Life of Christ in the Church of Sant'Angelo in Formis*, Princeton (NJ): Princeton Universtiy Press, 1967; Fernanda de' Maffei, "La Sibilla "Tiburтина" e "Prophitessa" nel ciclo degli affreschi di Snat'Angelo in Formis," in *Monastica. IV. Scritti raccolti in memoria del XV centenario della nascita di S. Benedetto (480-19980)*, Montecassino, 1984, pp.9-20; Dorothy F. Glass, "Pseudo-

- Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania,” *Dumbarton Oak Papers*, 41 (1987), pp.214–226; Idem, *Romanesque Sculpture in Campania*, Universtiy Park, PA: Pennnsylvania State University Press, 1991, pp.159–214; Luciana Speciale, “Memoria e scrittura. Tituli, programma, scelte d’immagine da Montecassino a Sant’Angelo in Formis,” in *Medioevo: Immagine e memoria*, a cura di Artulo Carlo Quintavalle, Parma-Milano: Electa, 2009, pp.144–153; Manuel Castiñeriras, “Da Virgilio al Medioevo: Postille sulla rinascita della Sibilla in Campania (XI–XIII secolo),” *Arte medievale*, 4 ser. 6 (2016), pp.97–110.
- 4) インスクリプションは、クラウス (Kraus, *op.cit.* [Berlin, 1893], pp.24–25) とガンハウス (Gunhouse, *op.cit.*, pp.54–88) に従う。筆者は2015年2月に現地調査を行ったが、スパンドレルは高い場所に位置しており、判読しがたい箇所が多かった。デ・マッフエイ (De Maffei, *op.cit.*) の記述は大胆な推測に基づいており、多くは受け容れることができない。Cf. Glass, “Pseudo-Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania,” p.218, n.35; Idem, *Romanesque Sculpture in Campania*, p.216, n.56.
- 5) De Maffei, *op.cit.*, p.28.
- 6) Kraus, *op.cit.*, p.25.
- 7) Salazaro, *Studi sui Monumenti*, p.50.
- 8) Parente, *op.cit.*, p.86; Wettstein, *op.cit.*, p.59; Morisani, *op.cit.*, p.86; De’ Maffei, *op.cit.*, p.28; Glass, “Pseudo-Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania,” p.218, n.31; Idem, *Romanesque Sculpture in Campania*, p.216, n.52; Gunhous, *op.cit.*, p.55.
- 9) Minott, *op.cit.*, p.192.
- 10) クラウスに拠る。ガンハウスでは *Ecce veni<e>t ad templum*.
- 11) Kraus, *op.cit.*, p.25.
- 12) Gunhous, *op.cit.*, p.55.
- 13) (4) 「バラム」, (13) 「ソロモン」, (14) 「ゼファニヤ」の場合も同様である。
- 14) Salazaro, *op.cit.*, p.48; Kraus, *op.cit.*, p.24.
- 15) Morisani, *op.cit.*, p.85; Simone de Luca, *Le sibille attraverso la storia, l’arte e il mito*, Roma: Accademia degli incolti, 1999, p.28.
- 16) Lactantius, *Divinae institutiones*, 1, 6, 8, ed. S. Brandt, *Corpus Scriptorum Ecclesiorum Laniorum*, vol.19, Wien, 1890, p.20; Lactance, *Institutions divines*, ed. P. Monat, Sources chrétiennes, n.204, livre 1, Paris, 1973, p.76.
- 17) 以下を参照。伊藤博明『ヘルメスとシビュラのイコノロジー——シエナ大聖堂に見るルネサンス期イタリアのシンクレティズム研究』, ありな書房, 1992年, 30ページ。同「ティブルのシビュラ——中世シビュラ文献の紹介と翻訳(1)」, 『埼玉大学紀要(教養学部)』第45巻第1号(2009年), 1ページ。同「ラクタンティウスと『シビュラの託宣』」, 『埼玉大学紀要(教養学部)』第46巻第2号(2010年), 35ページ。
- 18) Isidorus, *Etymologiarum sive origium libri XX*, 8, 8, ed. J.-P. Migne, *Patrologiae lati-*

- nae*, tom. 82, coll. 309C-310A.
- 19) Raban Maur, *De universo*, 15, 3, ed. J.-P. Migne, *Patrologiae latinae*, tom. 111, coll. 420B-422B.
- 20) Montecassino, Archivio dell'Abbazia, Cass. 132 (Montecassino 1022), p.379b. この写本はファクシミリ版が刊行されており (Raban Mauro, *De rerum naturis*, Cassin. 132 / *Archivio dell'Abbazia di Montecassino*, Torino: Piuli et Verlucca, 1994), 専修大学附属図書館に所蔵されている (本館特別書庫038/R11)。Cf. Giulio Orofino, "Per una filologia delle illustrazioni del *De rerum naturis* di Rabano Mauro," in Raban Mauro, *op.cit.*, *Commentari a cura di Gulielmo Cavallo*, p.156; Idem, *I codici decorate dell'Archivio di Montecassino. II.2. I codici preteobaldiani e teobaldiani*, Roma: Istituto poligrafico dello Stato, 2000, p.78.
- 21) Castiñeriras, *op.cit.*, pp.101-102.
- 22) Emile Mâle, *Quomodo Sibyllas recentiores artifices repraesentaverit*, Paris: Apud Ernestum Leroux, 1899, p.16.
- 23) この読み方の正しさについては、以下を参照。E.A. Loew, *The Benedictian Script. A History of the South Italian Miniscule*, Second ed. by Virginia Brown, I, Roma: Edizioni di storia e letteratura, 1980, pp.187, 189.
- 24) Augustinus, *De civitate Dei*, 18, 23, eds. B. Dombart et A. Kalb, *Corpus Christianorum Series Latina*, 47-48, Turnhout: Brepolis, 1955, p.613. このアクロスティックは元来、ギリシア語による『シビュラの託宣』第8巻217-250行に見いだされるものである (*Oracula Sibyllina*, ed. Joh. Geffcken, Leipzig: J.C. Hinrichs, 1902, pp.153-157)。以下を参照。伊藤博明『ヘルメスとシビュラのイコノロジー』, 52-53ページ。同「シビュラの行方——アウグスティヌスからバラツォ・オルシーニまで——」, 『西洋中世研究』(西洋中世学会), 第6号(2014年), 90-94ページ。
- 25) Wettstein, *op.cit.*, p.59; Mappert-Schmidt, *op.cit.*, p.23; Glass, "Pseudo-Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania," pp.215-216; Idem, *Romanesque Sculpture in Campania*, p.213; Jacobitti e Abita, *op.cit.*, p.55; Gunhouse, *op.cit.*, p.57.
- 26) De' Maffei, *op.cit.*
- 27) Kraus, *op.cit.*, p.25.
- 28) E.g. Wettstein, *op.cit.*, p.85; Glass, "Pseudo-Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania," p.218, n.35; Idem, *Romanesque Sculpture in Campania*, p.216, n.56; Gunhouse, *op.cit.*, p.17.
- 29) Joh. Geffcken (ed.), *Die Oracula Sibyllina*, GCS 8, Leipzig: Hinrichs, 1902. ゲフケン以降の校訂版としては以下がある。Alfons Kurfess, *Sibyllinische Weissagungen*, Berlin: De Gruyter, 1951.
- 30) 『シビュラの託宣』全体のサーヴェイと研究文献については以下を見よ。John J. Collins, "The Development of the Sibylline Tradition," in W. Hasse-H. Temporini (ed.),

- Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, II 20.1, Berlin-New York: De Gruyter, 1983, pp.421-453.
- 31) これらの諸巻には邦訳が存在する。『シビュラの託宣』, 佐竹明訳, 『聖書外典偽典』6, 教文館, 1976年に所収。
- 32) これらの諸巻には邦訳が存在する。『シビュラの託宣』, 柴田有訳, 『聖書外典偽典』3, 教文館, 1975年に所収。
- 33) Augustinus, *Epistolae*, 222-224, Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum 54, Wien, 1910, pp.446-454.
- 34) Quodvultdeus, *Contra Iudaeos, Paganos et Arrianos*, in *Opera Quodvultdeo Carthaginensi episcopo tributa*, ed. R. Braun, Corpus Christianorum Series Latina, 60, Turnhout: Brepols, 1976. クウォドウルトデウスについては以下を見よ。B. Braun, “Quodvultdeus,” *Dictionnaire de la spiritualité*, Paris, 1970 sqq., tom.15/2, pp.2882-2889; V. Rossi, “Adversaries and Friends of Augustine,” in *Patrology*, ed. A. Berardino, trans. P. Solari, Westminster, MD: Christian Classics, 1987, vol.4, pp.501-503; M.P. McHugh, “Quodvultdeus,” in *Augustine through the Ages: An Encyclopedia*, Cambridge: Grand Rapids, 1999, pp.693-694. 伊藤博明「クウォドウルトデウスと『シビュラの託宣』」, 『埼玉大学紀要(教養学部)』, 第51巻1号(2015年), 33-48ページ。
- 35) Quodvultdeus, *op.cit.*, pp.241-250. 邦訳は, 伊藤, 前掲論文, 41-48ページ。
- 36) Cf. Karl, Young, “Ordo prophetarum,” *Transactions of the Wisconsin Academy of Science, Arts and Letters*, 20(1922), p.4; Idem, *The Drama of the Medieval Church*, 2 vols., Oxford: Clarendon Press, 1933, vol.2, p.125.
- 37) Ed.Young, “Ordo prophetarum,” pp.5-10, Idem, *The Drama of the Medieval Church*, vol.2, pp.126-131.
- 38) ‘Iam noua proles demittitur alto.’ ウェルギリウスのテキストでは ‘iam noua progenies caelo demittitur alto.’
- 39) *Ibid.*, 15, 4, p.247.
- 40) “ut carnem praesens, ut iudicet orbem.” 複数の写本においては “in carne” となっており, その場合は「身体において, 地上を裁くために現われる」と訳出しようだろう。ギリシア語テキストは “ut carnem” を支持している。“Σίρκα παρὸν πᾶσαν κρῖναι καὶ ἰ κόσμον ἅπαντα” (*Oracula Sibyllina*, VIII, 219, ed. Geffcken, p.154).
- 41) Augustinus, *De civitate Dei*, 18, 23, eds. Dombart et Kalb, p.613. Cf. *Oracula Sibyllina*, 8, 217-250, ed. Geffcken, pp.153-157.ギリシア語からの邦訳, またアウグスティヌスとの相違については, 伊藤「シビュラの行方」, 92-93ページを見よ。
- 42) *Ibid.*, 16, 4-5, p.249.
- 43) Cf. Augustinus, *De civitate Dei*, 18, 23, eds. Dombart et Kalb, p.612.
- 44) 典礼劇については, ヤングの研究(註36)に加えて, 次を参照せよ。Carl J. Stratman, *Bibliography of Medieval Drama*, 2nd ed., vol.1, New York: F. Unger, 1972, pp.124-126;

- Lynette R. Muir, *The Biblical Drama of Medieval Europe*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995, Chap.6.
- 45) Young, *The Drama of the Medieval Church*, vol.2, p.138-145; Cf. Idem, "Ordo prophetarum, pp.1-82 ; Muir, *op.cit.*, p.84.
- 46) Ed. Young, *The Drama of the Medieval Church*, vol.2, p.139.
- 47) Quodvultdeus, *op.cit.*, 13,1, p.243.
- 48) Ibid., 12, 2, p.234:"Cum uenerit sanctum sanctorum, cessabit unctio."
- 49) Ed.Young, *op.cit.*, p.140: "Sanctus Sanctorum uenit,/ et unctio deficiet."
- 50) *Daniel*, 9:24: "... unguatur sanctus sanctorum."
- 51) Cf. Glass, "Pseudo-Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania," p.218; Idem, *Romanesque Sculpture in Campania*, p.216.
- 52) Ed. Young, *op.cit.*, p.140.
- 53) Cf. Ibid., p.145-170.
- 54) Ibid., p.145.
- 55) Ibid., pp.149-150.
- 56) Cf. D. Maurus Inguanez, *Codicum Casinensium Manuscriptorum Catalogus*, 3 voll., Monte Cassino, 1915, vol.1, pp.101-103, 103-109,119-123, 130-137, 137-141, 180-183; vol.3, pp.96-100; Loew, *op.cit.*, vol.2, pp.65-67, 69, 74, 87-88; Glass, "Pseudo-Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania," p.217; Idem, *Romanesque Sculpture in Campania*, p.215; Catifeiras, *op.cit.*, p.98.
- 57) Glass, "Pseudo-Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania" ; Idem, *Romanesque Sculpture in Campania*, pp.159-214.
- 58) Quodvultodeus, *op.cit.*, 10, 6, p.241.
- 59) Ibid., 13,1, p.243.
- 60) Ibid., 13, 2-3, p.243.
- 61) Ibid., 12, 2, p.242.
- 62) Paul Weber, *Geistliches Schauspiel und kirchliche Kunst in ihrem Verhältnis erläutert an einer Ikonographie der Kirche und Synagoge*, Stuttgart: Ebner & Seubert (Paul Neff), 1984, p.51. Cf. Glass, "Pseudo-Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania," p.218; Idem, *Romanesque Sculpture in Campania*, p.216.
- 63) Ed. Young, *op.cit.*, pp.133-137.
- 64) *Officia propria Festorum Salernitanae Ecclesae*, Napoli, 1594, pp.75-79.
- 65) Young, *op.cit.*, p.133.
- 66) Quodvultdeus, *op.cit.*, 13, 2-4, ed. Braun, p.241.
- 67) Ed.Young, *op.cit.* p.134.
- 68) Quodvultdeus, *op.cit.*, 15, 7-8, ed. Braun, p.247.
- 69) Ibid., 16, 1-2, p.248.

- 70) Ed.Young, *op.cit.* p.136.
- 71) Raban Maur, *op.cit.*, 15, 3, col.420b.
- 72) Cf.Bernard McGinn, "Teste David cum Sybilla: The Significance of the Sibylline Tradition in the Middle Ages," in *Women of the Medieval World: Essays in Honor of John H. Munday*, eds. by Julius Kirshner and Suzanne F. Wmple, Oxford: Basil Blackwell, 1985, pp.7-35; Peter Dronke, "Hermes and the Sibyls: Continuations and Creation," in *Idem, Intellectuals and Poets in Medieval Europe*, Roma: Edizioni di storia e letteratura, 1992, pp.219-244; *Idem*, "Medival Sibyls: Their Charcter and their Auctoritas," *Studi medievali*, 36, 2 (1995), pp.581-615.
- 73) Cf. Ferdinando Neri, "La taradizioni italiane della Sibilla," *Studi medievali*, 4 (1912-13), pp.213-230; Patrizia Lendinara, "The *Versus Sibyllae de die iudicii* in Anglo-Saxon England," in *Apocryphal Texts and Traditions in Anglo-Saxon England*, eds. by Kathryn Powell and D.G. Scragg, Cambridge:D.S. Brewer, 2003, pp.85-101.
- 74) テクストは以下に所収。Ernst Sackur, *Sibyllinische Texte und Forschungen*, Halle: Max Niemeyer, 1898, pp.177-187. 邦訳は以下に所収。伊藤博明「ティブルのシビュラ——中世シビュラ文献の紹介と翻訳(1)」, 『埼玉大学紀要(教養学部)』, 第45巻第1号(2009年), 1~12ページ。Cf. Paul J. Alexander, *The Oracle of Baalbek: The Tiburtine Sibyl in Greek Dress*, Washington, DC: Dumbarton Oaks Center for Byzantine Studies, 1967; Anke Holdenried, *The Sibyl and Her Scribes. Manuscripts and Interpretation of the Latin Sibylla Tiburtina c.1050-1500*, Aldershot — Burlington: Routledge, 2006.

図版出典一覧

- 図1 Gian Marco Jacobetti e Salvatore Abita, *La Basilica benedettina di Sant'Angelo in Formis*, Napoli: Edizione scientifiche italiane, 1992, fig.5.
- 図2 Gian Marco Jacobetti e Salvatore Abita, *La Basilica benedettina di Sant'Angelo in Formis*, Napoli: Edizione scientifiche italiane, 1992, fig.25.
- 図3 Ottavio Morisani, *Gli affreschi di Sant'Angelo in Formis*, Cava dei Tirreni — Napoli: Di Mauro, 1962, fig.5.
- 図4 Gian Marco Jacobetti e Salvatore Abita, *La Basilica benedettina di Sant'Angelo in Formis*, Napoli: Edizione scientifiche italiane, 1992, fuori pagine.
- 図5 Mario d'Onofrio e Valentino Pace, *Italia Romanica*, Milano: Jaca Book, 1981, fig. 67.
- 図6 筆者撮影。2015年2月13日。
- 図7 *Enciclopedia dell'arte medievale*, Roma: Istituto della Enciclopedia italiana, 1991, vol.10, p.588.
- 図8 Raban Mauro, *De rerum naturis*, *Cassin.132 / Archivio dell'Abbazia di Monte-*

cassino, Torino: Piuli et Verlucca, 1994.

図9 Ottavio Morisani, *Gli affreschi di Sant'Angelo in Formis*, Cava dei Tirreni — Napoli: Di Mauro, 1962, p.56.

図10 Ottavio Morisani, *Gli affreschi di Sant'Angelo in Formis*, Cava dei Tirreni — Napoli: Di Mauro, 1962, p.55.

〔付記〕

サンタンジェロ・イン・フォルミスフォルミス聖堂の調査は2015年2月13日に行った。ご協力いただいた山本真司氏（天理大学）に感謝申し上げたい。

なお、本稿の一部は、『人文科学年報』（専修大学人文科学研究所）第48号（2018年）所収の、拙稿「セッサ・アウルンカ聖堂のシビュラ像について」の「3 中世における「預言者たちとシビュラ」の伝統」と重複していることをお断りしておきたい。